

国語総合	報告課題第六回	年	組	氏名
解説				

【かぐや姫のおひたち】

まず、全文を読んでみましょう。この第六回の前半は、皆さんにも聞きなじみのある「かぐや姫」の元祖、竹取物語の冒頭となっています。今回は、主だった内容と古文訳を書き下します。よく読みながら、古語や文法などは最初は気にせず内容のほうを理解しましょう。段落は左の通りです。

- ① 初め～二〇六ページ七行
- ② 二〇六ページ八行～二〇六ページ九行
- ③ 二〇六ページ一〇行～二〇七ページ四行
- ④ 二〇七ページ五行～終わり

第一段落―かぐや姫の発見

- 1、初めく名をば、さかきの造となむいひける。
↓竹取の翁の紹介。
- 2、その竹の中に、いとうつくしうてゐたり。
↓翁が竹の筒の中に、三寸ばかりの女の子を発見する。
- 3、翁言ふやう、く家へ持ちて来ぬ。
↓翁は自分に授けられた子であると判断して、女の子を家に持ち帰る。
- 4、妻の姫に預けてく籠に入れて養ふ。
↓翁は女の子を妻に預け、大切に養育する。

第二段落 翁の幸運

↓ この子を見つけてから、翁は黄金のつまった竹を見つけ続け、次第に裕福になった。

第三段落 かぐや姫の成長

- 1、この児、く裳着す。
↓この児は、ぐんぐん成長し、三月たつと一人前の大きさになったので、髪上げや裳着の成人式を行った。
- 2、帳の内よりもく腹立たしきことも慰みけり。
↓貴族の姫君のように大切に育てられるこの子は、光り輝く美しさであった。翁はこの子を見ると、苦しい気持ちもおさまり、腹立たしいことも慰められた。

第四段落 かぐや姫の命名

- 1、翁、竹を取ることく勢ひ猛の者になりけり。
↓翁は黄金の入った竹を取ることが続き、有力な大富豪になった。
- 2、この子くつけつ。
↓この子がとても大きくなったので、三室戸齋部の秋田を招いて命名式を行った。「なよ竹のかぐや姫」と名づけられた。

【枕草子】

この単元も、実に有名なものとなっています。日本の季節は四つの季節を順々に繰り返してきますが、どの季節にも良さがありません。その良さを表現したのが、今回の枕草子となっています。段落ごとに季節を分けている文章構成は、読んでいて楽しくなってきます。段落は左の通りです。

- ① 初め〜二二二ページ三行
- ② 二二二ページ四行〜二二二ページ七行
- ③ 二二二ページ八行〜二二三ページ二行
- ④ 二二三ページ三行〜終わり

第一段 春の美

- 1、「春は、あけぼの。」
↓春の美の焦点となる時間帯の提示。
- 2、「やうやう」〜終わり
↓その具体的な情景。

第二段 夏の美

- 1、「夏は、夜。」
↓夏の美の焦点となる時間帯の提示。
- 2、「月のころは」〜終わり
↓その具体的な情景。「をかし」と批評される対象物。

第三段 秋の美

- 1、「秋は、夕暮れ。」
↓秋の美の焦点となる時間帯の提示。
- 2、「夕日のさして」〜終わり
↓その具体的な情景。「あはれ」と批評される「鳥」と、「をかし」と批評される「雁」、「言ふべきにあらず」と批評される「風の音」「虫の音」

第四段 冬の美

- 1、「冬は、つとめて。」
↓冬の美の焦点となる時間帯の提示。
- 2、「雪の降りたるは、〜いとつきづきし。」
↓その具体的な情景。「言ふべきにもあらず」「つきづきし」と批評される対象物。
- 3、「昼になりて、〜わろし。」
↓冬の美にそぐわぬ昼の情景。

それらを踏まえたうえで、報告課題に取り組んでいきましょう。